

史遊会通信

No.226号
平成25年
12月10日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

今年の読書特集号

会員の活動 柴田弘武氏

『森浩一先生を偲ぶ会と追悼講演会』

日時 12月28日(土) 当日受付(先着順)

場所 港勤労福祉会館第一洋室(定員百名)

JR 田町駅五分/地下鉄三田駅一分

偲ぶ会 十一時~十二時 会費は無料

来賓挨拶 大塚初重先生

追悼講演会 十三時半~十六時半

会費千五百円

メインテーマ 『地域学と町人学者』

サブテーマ 「隼人と熊襲、そして蝦夷」

① 「隼人とは」

竹村紘一先生

(古代史懇話会代表)

② 「蝦夷とは」

柴田弘武先生

(えみし学会会長)

③ 「森浩一先生と隼人と熊襲」 菊池秀夫

(九州の歴史と文化を楽しむ会会長)

④ 「熊襲と吉備と邪馬台国と日本建国の謎」

平山牧人 (東京吉備文献研究会代表)

例会のお知らせ

◎ 十二月忘年会

日時 平成二十五年十二月十一日(水)

午後六時~八時

会場 学士会館

会費 六千円

出欠のご返事は十一月二十七日まで

◎ 一月例会

日時 平成二十六年一月二十二日(水)

午後六時~八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 小田紘一郎氏

テーマ 文学・音楽等雑話

源氏物語と平家物語と井上靖

およびワーグナー

◎ 一月号自由執筆 森下征二、佐藤健一、

村上邦治の諸氏 締切十二月末

今年読んで感動した本

三戸岡 道夫

「禅の心」小関栄著

この「禅の心」は二十ページほどの小冊子であるが、禅に関する哲学が凝縮されていて、感動的であった。

著者はここ七年間ほど坐禅を続けているのであるが、その体験の上に立って、坐禅とは何か、坐禅の心構え、坐禅の歴史、坐禅と無の精神など、広範囲にわたって述べられている。坐禅を長くやっていると無我の境地になり、それは無の心となり、そして悟りの境地へと入って行くのである。

私がとくにこの書の中で関心を引かれたのは、「無の心」と「脳の動き」とは、どのような関係にあるのか、という項目であった。これまで禅や脳に関する本は若干読んだことはあるが、本書のようなことが書いてあるものはなかった。

それは要約すると、次のようである。

人間の脳は、平常時には β 波が出ている。

それが坐禅を始めると、脳内セロトニン神経

が関係して、大脳の働きが抑えられ、 α 波や θ 波が出てくるというのである。

まず α 波が出てくると、大脳の中の理性的部分（たとえば自他の区別とか、言葉で物事を考えると、いわば大脳の大脳たる所以の働き）の働きが抑えられる。そして更に進むと θ 波になる。 θ 波が入ってくると、外から脳への刺激がなくなるので、休む状態になり、睡眠モードに移っていき、全体に大脳の働きが押さえられてしまうのである。

以上のことを一口で言えば、

（無の境地とは、医学的に脳に α 波や θ 波が入り、大脳の論理思考的部分の活動が抑制された状態である）

ということになるのである。

すると次のようなことが考えられる。

これからは坐禅などをしなくても、大脳に α 波や θ 波を投入すれば、医学的に無の境地に達することが出来るのではないかと思うのである。現在そのようなことが医学的に出来るのか、出来ないのか、それは知る由もないが、しかし最近の著しい医学の進歩から見ても、将来必ずそのようなことが可能になるのではないかと思われる。

するとこれからは無私の心境に達するため

に禅寺へ行って坐禅を組むのではなく、病院に行つて脳へ α 波や θ 波を注入してもらえばいいわけである。したがって今後、大学病院などの大きい病院には、「無我」科の部屋が出来るであろうし、禅寺には坐禅を組む畳の上に注射針が置いてあつて、坐禅を組むか、注射を打つか、選択できるようにするのではあるまいか。

最近の医学や情報技術のめざましい進歩ぶりには目を瞠るばかりであるので、小関栄の「禅の心」も、このように読んだのである。

これからはロボットも、そろそろ具体化して、人間社会の仲間入りをしてくるであろう。町を歩いていて、すばらしい美人だったり、親切な人だったり、商店の店頭サービスが一番いいのはロボットである、という世界が来るかも知れないのである。

するとロボットの脳に α 波や θ 波を当てたら、どうなるのであろうか。ロボットは無の精神になれるのか。ロボットは道徳行為においても人間に勝ることが出来るのか。ロボットはどこまで発達するのか、夢は果てしなく広がるばかりである。

『敗者の古代史』ほか

柴田弘武

今年の八月、森浩一氏の『敗者の古代史』

(二〇一三年六月二一日刊)を読んでいる途中、八月六日の朝刊に著者が亡くなった記事が載り驚かされた。私は著者を直接知っているわけではなく、膨大な著作や論文のほんの一部しか読んでいないがかねてから氏の考古学の確かさ、文献資料の扱い方等に深い尊敬の念を抱いてきた。それだけに何か因縁みたいなものを感じたものである。

本書は、「饒速日命と長髓彦」の章から「大友皇子の死とその墓」まで一九の章に分けて、『日本書紀』や『古事記』に表れる古代史上の敗者が取り上げられている。いずれも考古学を踏まえての人物・事件の解釈で説得力がある(もつとも私はその全てに納得している訳ではないが…)。

この本の最後に新人物往来社の深萱真穂氏との短い対談が載っている。その中で深萱氏の「日本には『判官びいき』という言葉があります。敗者の立場から歴史をみる、という姿勢が欠けていたのは不思議です」という問

に対し、森氏は「研究者の問題ですね。そのほうが楽だから、史書に書いてあるとおりの研究しかしてこなかったのです。しかし、書いてある言葉の裏の事件や歴史を読み解くのが、研究者の大きな仕事であるはずです。…」と答えています。

研究者にとって耳の痛い言葉が氏の遺言になったのは、いかにも町人学者らしい生き様を示しているように思えた。

『日本語になった縄文語』鈴木健著

鈴木氏には『常陸国風土記と古代地名』、『縄文語の発掘』(共に新読書社刊)などがあるが、本書は私家版である。氏はアイヌ語は縄文語の伝統を引き継いでおり、アイヌ語を介すれば「紀・記」や「万葉集」などの解釈困難な言葉も理解できるとして、多くの実例を挙げて実証している。私は大いに啓発されている。

例えば『書紀』神代第九段で、天稚彦が父の怒りに触れて殺されてしまう。その葬儀の描写の中で「川雁(かはかり)を以て、持傾頭者(きりもち)及び持帚者(ははきもち)とし」とある。岩波大系本の頭注に「キサリの語義未詳。持傾頭者の意は、纂疏に『謂拳死人頭者』とある」とある。これについて鈴木氏は「死者の

頭を持ち上げれば自然に傾頭となる。そのとき傾頭を持つ者の両手の位置は耳の後ろにある。キサリ持ち＝耳持ち、キサリ＝耳である。

アイヌ語に『Kisari. 耳。地形では耳のように突出している部分 ^ Key 耳 sar. 尾 v?』とあるとおりに「いい、『奥の細道』で有名な象潟(秋田)や千葉県の木更津の地名もその地形が耳形だったことによるものとしている。

なお「キサ」を「象」の字で書くのは『和名抄』に「象 岐佐…大耳、長鼻、眼細、牙長者也」とあるように、古代では象をキサと言ったからだ、としている。私は吉野に行ったとき、「象の小川」「象山」がなぜ「キサの小川」「キサ山」と呼ばれるのか不思議に思ったことがあったが、これで氷解した。そのほか「スガル乙女」「因幡の白兔」等々目が覚めるようであった。

『古墳が語る古代史の「虚」』相原精次著

本書については本誌前号で中山さんが紹介している。私も本書で前方後円墳が全国で一番多いのは千葉県で、二位が茨城県、三位が群馬県であること(因みに奈良県は八位)を知って改めて驚かされた。

今年感動した三冊の本

中山 喬央

『考古学の散歩道』田中琢・佐原真著、岩波新書、一九九三年。

今年の一月二十七日、「アジアの青銅器」シンプで、金関怒はチャイルドが六十六歳で死んだのは自殺だった。だから田中琢も六十歳で考古学を止めるんだといって、学会から去ってしまった、という発表をした。たまたまその事を、白石市教育委員会の日下氏に知らせたところ、面白い本がありますよ、といって教えてくださったのが本書である。

本書一八二頁からの4考古学の戦争には「シレジア地方」いまのポーランド領のシロクス地方、について、一九二〇年英国首相ロイド・ジョージはシレジアは昔からゲルマン人のものであり、この土地に対するポーランドの主張は理解できない、としたが、ポーランド人は、歴史が始まってこのかたシレジアはスラブ人の住む所であり、何世紀ものあいだにはドイツ化したところもあったが、十九世紀には再びスラブ人のポーランド民族が復活したのであり、その住民の核は終始スラブ人だったと主張した。

これがベルリン大学教授グスタフ・コッシナと、ベルリン大学でコッシナに学び、後にポズナニ大学教授となるユゼフ・コストシェフスキの論争である。

ヴェルサイユ会議は住民投票でその帰属を決めることとし、住民投票は一九二一年三月に実施、投票率97%、ポーランドへの併合を求めるものが40%、ドイツへの残留希望は60%に達したが、戦勝国はドイツに厳しく、この地方の工業地帯の大部分を含む上シレジアの主要部分をポーランド領と決定したのである。ナチスドイツは、かつてゲルマン民族が住んでいたとする地域をドイツ人の原郷と呼んで、それを領土として回復することを国是とした。一度はポーランド国も消滅した。

今、世界で考古学が最も盛んな国はイスラエルである。次いでヴェトナムやフィリピンとの間で領有問題が発生している西沙諸島や南沙諸島では、中国の考古学者が漢民族の遺構や遺物を求めて調査している。

そこにコッシナとコストシェフスキの闘いが二重写しとなる、と田中琢は結んでいる。

これがコッシナを激しく非難したチャイルドの自殺と、田中琢の考古学引退とに結びつくのであろうか？

『昆田文次郎君の生涯』後昆会、一九二九年。

本書は早稲田大学（東京専門学校邦語法律科明治十五年入学）第一期生である同氏の生涯を没後関係者が会いより綴ったものである。

同氏は明治十九年弁護士試験に合格、岡山法律事務所に入るが、明治二十七年に岡山氏が病没した事もあり、明治三十年古河商店に入り三等副支配人に就任、足尾鉍毒問題に対応する事となる。明治三十一年、庶務課長に就任、足尾鉍毒予防工事を完了させている。

その後大正二年、古河合名会社社理事就任、大正六年には早稲田大学評議員・維持員就任、大正十年、古河合名理事長に就任する。時あたかも日本産銅は七万トンと称せられ、文官最初の海軍大臣事務管理に就任した原首相が東京駅頭で中岡良一に刺殺され、ワシントン会議で日英米仏四国条約調印・日英同盟廃棄が行なわれた年であった。渋沢栄一の追悼の辞、附録まで入れると八一五頁に及ぶ大著であるが、古河家をめぐる様々な問題、金原明善・田中正造等との関係、早稲田大学の経営に関する側面的情報等も得られて面白い。

『古墳が語る・呪縛された歴史学・古代の「虚」』相原精次、彩流社、二〇一三年。

自由執筆で「史遊会通信」二二五号に掲載。

今年感動した本

小田紘一郎

一、感動というより熱中した本(又は音楽)として

①源氏物語およびその関連書

②平家物語

③ワグナーのオペラ・楽劇、を挙げておこう。

いずれも世に知られた大作の古典である。

二、ここ一〇年近く源氏物語を中心に読み(聴き)、大筋はほぼ理解できたと思っているが、その真意、意図、項目別問題点等については、まだまだわからない事が多く、最近、つれづれにまかせつつ、つらつら考えている。その為の有効な手段として、他のものと比較することであるとの考えの下に、①②③に接している。この他に井上靖、徒然草、枕草子等をもひもといている。これらに共通していることは、「人生」と「人間」について鋭い考察がなされていることである。又、歴史をも知ることになる。

今年、朝日やNHKのカルチャーセンターに出向き、専門家の話を聞き、なるべく率直な質問をしたいと思っており、今、実行中である。

三、もう少し具体的に書いてみよう。

①のテキストは、NHK文化センターより出版されている講座である。一〇年以上前にラジオで放送されたもので(講師、鈴木一雄、九年二月かかっている)一時間半のテープが約二五〇巻あ

る(一講座四十五分であるもので五〇〇回近く放送された)解説、原文朗読、解釈となっており、解説の他、原文のみをとり出し聴いている。耳で文章を聴きつつ、目で訳本(瀬戸内源氏)を追うこともあり、全体を理解する上で実に有効である。とにかく文体が古文であって、流れるような美しさリズムに格調があるが、和歌(古今集等)が根底にある。こんな奥ゆかしい文章が昔の日本にはあったのだと感じ深い思想と合せ楽しんでいく。又、関連書として、「源氏物語ものがたり」(島内景二、新潮社)、「源氏物語の世界」(日向一雅、岩波新書)、「源氏物語」(大野晋、岩波現代文庫)等も何回も読んだ。

②一〇年前にやはりCDで求めていたもので十二巻の朗読である(嵐圭史)。前者と異なり漢文調でリズム感があり、私の好きなところは、海道下り、(重衡が鎌倉に下るところ)や最後の大原御幸(後白河法皇が建礼門院を訪れていくところ)である。源氏物語も平家物語もいずれも人間造型にも優れているが、前者は主として女性、後者は男性に焦点があるように思われる。同時に、池上彰一郎の「平家物語」(角川書店、上中下巻)も、清盛の見方等独特であって面白かった。吉川英治の「新平家物語」(講談社)には手がつけられず来年へ持ち越しである。

③ワグナーのオペラ・楽劇には、「さまよえるオランダ人」、「タンホイザー」、「ローエングリ

ン」「トリスタンとイゾルデ」「ニュルンベルグのマイスタージンガー」「ニーベルングの指環」「パルジファル」等がある。中でも指環は、四部作(ラインの黄金、ワルキューレ、ジークフリート、神々のたそがれ)であり、全部で十五時間を超える大作である。ドイツ語で歌われているのを訳文を見ながら聴いているが、なかなか疲れる。壮大なリズムと後期ロマン派らしい美しいメロディが随所に出てくるが、その奥には深い思想、哲学があり、理解するのに手間取っている。今年の秋、演奏会に行つてバイロイト版(実況録音で、サバリツシュやベームが指揮している)を求められたことは幸せであった。多くの名指揮者の演奏に接している。

四、源氏物語とワグナーの比較などなかなかユニークであると自分ながら思っているが、後者は確かな愛の陶酔や愛の二重奏が随所に見られるが、前者にはそれがあのか、愛とは何か等を考えさせられる。又、死においても後者は男と女の合体としての死(愛と死)が多いが、前者はそれぞれ別に死ぬ。これらは、何を意味しているのか。ここ数日間に感じたことであるが、権力(政治)と人間(愛)の問題は両者に共通であるとの思いを、改めて「桐壺の巻」を読んで強く意識している。くわしくは別の機会に譲りたいが、何よりも大切な事は、くりかえし、くりかえし読み、聴くことであると痛感しつつ年も終わろうとしている。

今年感動した三冊の本

村上邦治

①『伊勢神宮と出雲大社』

新谷尚紀著 講談社選書

今年、伊勢神宮二〇年毎の「式年遷宮」と、出雲大社六〇年毎の「大遷宮」が重なり、これら古社に、注目があつまつた。しかし両社の創建について、多くの説があるものの、いまだ定説とされるものはない。

本書では、倭に代わる「日本」という国号、大王に代わる「天皇」という称号の成立は、七世紀後半の天武・持統朝とし、その存立思想は、伊勢神宮の創建にあつたとする。そして、祀られた天照大神のモデルは、持統天皇としている。

記紀神話に、出雲が重要な位置を占めているのは、伊勢神宮と対をなすものとして、出雲大社が創建されたからである。すなわち、「内なる伊勢」と「外なる出雲」の構築である。これにより、王権神話で政治は皇孫に、神事は大己貴神、との分業に、説得力を与えたのである。その為出雲の存在は、不可欠であり、八世紀から始まる、出雲国造神賀詞奏上儀式が、中央で重視されたのである。

本書は、「神話と歴史」を厳密に区分し、隋・

唐、半島情勢の影響を検証、記紀神話の成立を、七世紀末とした。両社は、その後、平安期に現在の祭祀が確立し、今日に至つたことを論証している。定着しつつある『日本書紀』記載の区分論や、考古学の新しい成果を取り入れ、両社の創建を、より厳密かつ、広い視野から、結論付けている。

遷宮で話題となつた今年、多くの方に、最新の成果をまとめた本書を薦めたい。

②『古事記とはなにか』

神野志隆光著 講談社学術文庫

本書は、九月に学術文庫として出版された。本書の特徴は、「全体が部分に偏在する」という立場から、改めて『古事記』を分析していることである。

著者は、『古事記』はあくまでも、律令国家確立に必要な天皇の正統性を、確証するために纏められたもので、『日本書紀』とは、別個な論理と構造をもっている、と主張する。

そのため「記紀神話」という形で一まとめにして、『古事記』と『日本書紀』を、正當に問わずにすましてきたことを批判する。『古事記』は、あくまで、天皇の神話の歴史であり、「天皇を軸とした神話の思想史」としてとらえ事を、強調するのである。

また本書では、これまで多くの研究者の主

張を、誠実・丁寧に批判・反証を行っている。著者の、五世紀以来、中国の影響を受けながらも、日本の独自性を出そうとしたとの説は、納得するものが多い。神話が語られることが多くなつた今日、本書の視点から、再度読み直すことを薦めたい。時宜を得た本である。

③『私の日本古代史（上・下）』

上田正昭著 新潮選書

日本古代史を代表する学者の、縄文時代から律令国家成立までの通史である。わざわざ「私」を挿入することにより、著者独自の古代観で、構成されている。

本書の特徴の一つは、縄文こそ日本文化の基層であるとの信念より、古代人の精神や信仰を詳述しており、弥生、古墳時代につながる日本文化の流れを追及している。

邪馬台国については、当時中国内の抗争と文献により、著者独自の見解を出している。

最後に、『天皇』・『日本』は、天武朝期に確立し、対外的に日本の存在感が増し、律令国家体制強化につながつたことを、主張している。これは①の新谷尚紀と同様である。

著者の八世紀までの日本古代史研究成果を集約し、初心者にも理解しやすく配慮されている。さすが第一人者の日本古代通史である。

藤原咲子の『母への詫び状』

新井 宏

我家では、新田次郎と藤原ていの夫婦が何かと話題になる。

幼子を三人かかえ、満州から陸路、朝鮮北部を通り、朝鮮半島を南下して日本に引き揚げる凄惨な逃避行を描いた藤原ていの『流れる星は生きている』は、昭和二十四年のベストセラーとなった。映画化のためにポストンバックに百万円を入れた男がやってきた。氣象庁に勤める夫の新田次郎の月給が一万円の時代である。

新田次郎はその頃から帰宅すると、狭い隣室にこもって何かを書き始めていた。『強力伝』で、昭和二十六年のサンデー毎日の懸賞小説に応募して、一等に当選し、昭和三十一年の直木賞に輝く出世作である。

何よりも面白かったのは、当選の連絡が入った時に、新田次郎が藤原ていに向って『強力伝』の原稿を机にたたきつけながら「ごまあみろ」と言って渡した場面である。

激しい夫婦であった。

「収入が多いのが、えらいんじゃないぞ……」
「いつ私がいばりましたか」

「毎日だ」

「お父さんはひがんでいるんですよ」

しかし、我が家での評価が極めて高い夫婦であった。

次男の藤原正彦は日本を代表する数学者であるが、両親から受け継いだ資質で、すばらしいエッセイを数多く書いています。

『若き数学者のアメリカ』では日本エッセイスト・クラブ賞、二百万部を超えたベストセラー『国家の品格』も出している。

正彦の描く新田次郎は四歳から四書五経を学び「卑怯を憎む」サムライであった。そのサムライと気丈な藤原ていのやりとりが実に面白いのである。

前置きが長くなってしまったが、実は、今回紹介しようとしているのは、彼らの末娘、藤原咲子の『父への恋文』と『母への詫び状』である。

その中に、こんな文章があった。

(父は)『流れる星は生きている』を書く母の背を押しながら、作家としての自信をひそかに得た。……『流れる星は生きている』が母の著作であることは間違いないが、父という名編集者を得て完成した作品……。すなわち「母の日記をもとにした一遍の小説」ともある。

そして気がついた。実は、小説家の新田次

郎は、女房に先を越された男を演じていたのではなからうかと。

咲子は小学校六年生の時、はじめて『流れる星は生きている』を読んで、その絶望感から死を考えたことがある。母が、赤ん坊の咲子の命を引き替えに二人の兄達を生かそうと迷ったのが本当だったのであろうかと。母の愛を独占したい年頃であった。

そのことが永年母娘の間のわだかまりになっていた。

咲子は夢の中で父にしばしば問いかけた。「本の中の赤ん坊は私じゃないよね。おはなしだよね」

「そうだよ、決まっているじゃないか。あの本はおはなしだよ……」

そして四十年後、偶然、実家の書庫から咲子宛のメッセージを付けた『流れる星は生きている』の初版本が見つかり、再読して「母が子ども達を必死に守り、生き抜こうとしていた姿に感動する。ある意味で、「小説」が彼女を苦しめていたのであるが、その「小説」が事実を超えて訴えかけていた。

それにつけても、この本によって、私が小説を書けない理由が判ったような気がする。

今年感動した三冊の本

平山善之

- ① 「続日本紀」 新日本古典文学大系
 ② 「人間と戦争」 莊子邦雄 朝日新聞出版
 ③ 「幕末維新変革史」 宮地正人 岩波書店

① 六国史の二番目「続日本紀」四〇巻の原文を読み下し文の助けを借りて通読してみた。続日本紀は謎が多い。桓武天皇在世中にその治世まで書かせたのは何故か。長屋王事件をはじめ、多くの陰謀、反乱、誅殺の真相は不明、道鏡と称徳天皇の間柄も謎だ。

通読しても謎は謎のままだが、第一の謎は私はいこう考える。即ち桓武天皇は自分の治世がどう後世に伝わるか、極めて神経質になっていた為だと。彼の父光仁天皇は井上皇后と他戸皇子を殺して桓武に皇位を譲った。自らはその光仁の意志に背いて同母弟早良皇子を皇太子の位から追った。二度の造都と征夷で民衆に負担を強いた。これで神経質にならないうほが異常であろう。

続日本紀の後半二〇巻は、腹心藤原経綱によつて編纂されたが、菅野真道による前半に先立って献上されている。しかも三五巻から四〇巻、肝心の部分は献上日不明である。書

き直しが繰り返された為ではなかるうか。継縄の妻は、百済王明信といい桓武天皇の生母高野新笠と同族、正三位尚侍に登つた女性。

経綱は桓武天皇と合作で、天皇に累が及ばぬよう苦心して書き上げたのであろう。

② 著者は当年九三歳になる刑法学者。

私が半世紀前、刑法総論の講義を聴き、演習に参加させて頂いた恩師である。当時ご自身の学説を構築中の時期で、よく「ゆうべ、寝ないで考えたのだが」と講義の冒頭言われるのを聞いて、「これが大学の講義というものか」と感銘を受けたものである。一方では、呑むと必ず童謡を歌われる純粹無垢な方。九三歳の今も変わらない。

「近代刑法思想史研究」「刑法総論」など著書は多いが専門外でも「和辻哲郎の実像」など優れた著述を著されている。

今年、「二学徒兵の思想史」という副題のもとに、戦争という巨悪に対する激しい憎悪と平和の尊さを主張する本を刊行された。そこには新聞に報道された記事、多くのひとの著作や発言が、法学者らしい丹念さで集められている。同時に始めと終りに掲げられたトルストイの反戦論などで著者の戦争反対が深い哲学によつて裏づけられていることがわかる。唯、この本は読者に「だから、こうせよ」と教えをたれるものではない。読者をして、ど

うしたらよいか、と考えさせる、考えざるを得ない気持ちにさせる本である。大学のゼミを久しぶりに懐かしく思い出した。

③ ある新聞書評では、この本は前国立歴史民俗博物館長であり、近代日本史学会の大御所である著者が「満を持して送り出した物語的歴史学の大作」という。

著者は広汎な資料を実証的に鋭く分析しつつ、現在の価値基準や結果から判断していなか常に自省する。そして当時を生きた人々、上は天皇から下は庶民にまで愛情に満ちたまなざしを向けている。

また「平田国学」派が果たした役割を指摘する。従来の維新史ではあまり触れられないが、幕末、平田国学は特に地方豪農・豪商・医者といった層に多くの門人を持った。この門人達のネットワークが内外の情報を迅速に伝播し、地熱となつて変革の原動力にもなつた、という事である。

同時に、天皇とか藩といった組織を法人として客観的にみる考えかたがあつた。個人の個人への忠誠という封建的観念から脱却した近代的思考が当時の志士達にあつたということとを教えてくれる。

今年感動した三冊の本

漆原直子

一、『口訳常陸国風土記』河野辰男著

ふるさと文庫 筑波書林

今年「常陸国風土記」編纂詔命一三〇〇年の年にあたるとして、茨城県内の博物館や歴史資料館では、それに因んだ企画展示やイベントを開催している。ちなみに、昨年は、「古事記」編纂一三〇〇年の年であった。風土記は古事記とほぼ同時代に『常陸国風土記』は七一三年(和銅六年)元明天皇の命により、当時の常陸国司安部狛秋麻呂から編纂が開始された。その後、石川難波麻呂、藤原宇合と国司が交替して行ったが、藤原鎌足の孫である藤原宇合と歌人・高橋虫麻呂らが主として編纂し、8年後の七二一年に完成したとされる。現存している「常陸国風土記」は、編纂当時の原型のままではなく、鎌倉期までは原型の完本があったが、その後いつの時代かは不明だが省略されて、天保十年に省略本を水戸藩の西野宣明が整理したものだという。

この『口訳 常陸国風土記』は、茨城県下

の出版社より『ふるさと文庫』シリーズの一つとして出版されている。ページ数も薄くて

読みやすい。が、私は著者の立ち位置にやや違和感を覚えた所がある。この本はその名の通り「茨城」という「ふるさと」を意識した

シリーズもので、他にも茨城県の地史に関する物を出している。著者は解説の中で、『常陸

国風土記』を二つの点から高く評価したいと述べている。まず一つ目に、漢文体で書かれて

いるのだが、文章自体が華麗で、叙情や叙

景の表現において文学的価値が高く、他の風土記と大きな違いであるという。二つ目は、

「我が常陸国開拓の実相を克明に記述している」ことだという。大和朝廷がどんな文化を

どう移植し、どう繁栄を極めてかが記述されているとしている。一点目については、私は、

『常陸国風土記』そのものは(但し、後世の改竄が無いとして)、当時の北関東地方を知る手

掛かりとして重要な史書だと思っているのでそれでよいが、二点目の大和朝廷の行いに対する評

価で、著者の立ち位置が大和朝廷側にあるという印象を受けた。私は、『常陸国風土記』は

日本列島史における先住民、蝦夷の歴史を考

える上での重要な記録書であると思っている。

征服者側に立つか、被征服者側に立つか、

それとも全く関係無い第三者側として見るかで、受ける感想は異なるのである。

二、『図説 ケルトの歴史 文化・芸術・神話を読む』

鶴岡真弓・松村一男著 河出書房新社

これはヨーロッパのケルト文化に関する解説書で、カラー写真も多くビジュアル的にも

きれいで、わかりやすい。古代ヨーロッパにおいては、ギリシャ文化とケルト文化という

二つの大きな文化の流れがある。ケルトにも「大陸のケルト」と「海のケルト」がある。

古代ケルト世界は、東はアナトリア半島の内陸部から西はイベリア半島とアイルランドに

まで及ぶ。ケルトの文化は、日本列島の古代文化との類似性を感じる。ケルトの文様を見

ていると、縄文式土器の文様や吉備の楯築遺跡の御神体石の直孤文等と重なって来る。さ

らに、フランスで出土したBC3〜2Cの石製の「双頭の彫刻」は、飛騨国の「両面宿禰」

を思わせる。またヨーロッパの地名は、ケルト語由来のものが多々あるようだ。ユーラシ

ア大陸の極西と極東という大きな隔たりはあ

るが、隣人のような気がする。

三、『知っておきたい「酒」の世界史』

宮崎正勝著 角川文庫

この本は十月の「飲酒の歴史と飲酒の今日の問題」というテーマで発表した時に、主に参考とした本である。世界の「酒」の歴史のみでなく、「酒」が歴史をどう動かして行ったかということについてもわかりやすく書かれており、しかも要点がしっかりと抑えられているので、大変参考になった。飲酒の好きな夫にも読ませてみたが、面白かったと感想を述べていた。

私の三冊

神津 眞久

『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』

加藤陽子著 第9回小林秀雄賞朝日出版社
明治から敗戦までの日本の経済・政治・外交を従来にはない切り口で掘り起こす。

本書は、肌理細かい資料を背景に、世界的

な視野で事象を解析する。

説得力に優れ、歴史の捉え返しを私に強いた。

『永遠の0（ゼロ）』百田尚樹著 講談社

昭和二十年敗戦の三日前に特攻隊で逝った祖父の姿を求めて、姉弟は僅かに残る、かつての知り合いを訪ね歩き、戦争末期にゼロ戦の飛行士達の追い込まれる苦悩を知ることになる。やがて祖父の人間愛に辿り着き、深い感動を覚える。

『楼蘭』・『敦煌』・『洪水』・『崑崙の玉』

一連の西域を舞台にした井上靖小説群

五月下旬から二週間に渡り、シルクロードの天山南路、西域南道に沿いたクラマカイン沙漠の周囲を旅した。高校生の頃からの憧れであった。当時夢中だった井上靖の一連の西域物を読み返し、沙漠を渡ってゆく風、胡楊や紅柳の群れを愛しんだ。

下山田允子さん ご逝去

長い間当会の事務局をお勤め頂いた下山田さんは、五月以来病氣療養中でしたが、去る十一月二十九日、東京船員保険病院で逝去されました。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

ご葬儀は近親者のみで営まれたそうです。

(幹事)